



チーフストラテジスト 瀧山裕二の Weekly Letter

第88回「上昇する金価格と半導体価格」

「金（GOLD）」の価格が1グラム＝20,000円を超えたとテレビニュースで報道されています。また、パソコンなどで多用されているDRAM半導体のスポット価格も1個9.5ドルと急騰しています。この2つの商品については、5月に発刊したウィークリーレター、第66回「半導体スポット価格に注目」、第68回「金価格の動向について」でお伝えしましたが、そこから5ヵ月が経ち、さらに価格は急騰しました。今週は、これら商品の価格動向についてお伝えします。

～「金」価格の動向～

裏面グラフ1をご覧ください。このグラフは、前回（ウィークリーレター第68回）と同じニューヨーク・商業取引所の金先物期近限月の週末値の推移を示しています。5/23の引け値は1トロイ・オンス＝3,363.6ドルでした。その時も最高値近辺でしたが、5ヵ月後の10/24の引け値は4,118.4ドルまで上昇しました。この間の騰落率は+22.4%、昨年末からの騰落率は+57.4%の上昇となりました。このように「金」の価格は、今年に入って大きく上昇していますが、その要因は何が考えられるのでしょうか？金価格の動き方は、昨年末から4月、4月から8月、そして8月から直近までの3つの期間で分かれているように見えます。まず、4月までの動きはトランプ大統領就任から高関税政策の実施までの期間と重なります。そのため、この期間の金価格の上昇要因はトランプ政権の通商政策や移民政策などに対する懸念が強くなったことと考えます。その後、4月から8月までは金価格の上昇は緩やかになりました。これは高関税政策が個別交渉によって関税率が抑えられ、世界経済に対する悪影響が軽減したためでした。8月から直近までの期間ですが、金価格の上昇は再び急騰しています。この期間は、9月のFOMCで政策金利が引き下げられ、その後も政策金利の引き下げ期待が継続したことが上昇要因の一つと考えます。

「金」は利子を産まない資産ですので、金利水準が下がると「金」に資金が向かいやすくなります。加えて米・露間でのウクライナ戦争をめぐる対立や米中間のレアアースをめぐる対立など地政学的なリスク要因が「金」の一段高の背景にあると思います。ただ、米中間の対立が収まりそうな状況となり、10/20に最高値4,336.4ドルを付けた後、「金」価格は調整局面となっています。

今後の「金」価格の見通しですが、新たな地政学リスクが発生すれば価格は再び上昇するかもしれませんが、当面は1トロイ・オンス＝3,800ドル～4,300ドル程度の水準で推移するのではないかと想定しています。次に金価格が大きく動くとすれば、来年5月のパウエル現FRB議長の交代時期が考えられます。来年に入るとパウエル議長の後任人事をめぐる思惑で「金」価格は乱高下しやすい状況になると考えます。

～DRAM半導体 スポット価格の上昇について～

私が注目しているもう一つの商品、DRAM半導体のスポット価格を確認してみましょう。グラフ2をご覧ください。このグラフも前回（ウィークリーレター第66回）と同じグラフです。5/9に1個＝2.68ドルであったスポット価格は、直近10/24には9.50ドルとなりました。データセンターなどでの取引が増えていたところにDRAM半導体を生産していた中国メーカーが来年2月頃を目途に生産を終了すると発表したため、価格が大きく上昇しました。5/9から10/24までの上昇率は3.5倍に急騰しています。スポット価格の上昇を受けて、大口取引価格も上昇しました。このままどんどんDRAM半導体価格が上昇するとは思いませんが、これまで安価であったDRAM半導体価格が上昇することで、パソコン、スマートフォン、サーバー機器の価格に波及するでしょう。10/14にWindows10のサポート期間が終了しました。この機にパソコンの買い替えをお考えの方は、早めに検討されることをお勧めします。

(2025/10/28記)

